

研究区分	教員特別研究推進 教育推進
------	---------------

研究テーマ	オンライン、オフラインを組み合わせたアクティブラーニング・プログラムの開発				
研究組織	代表者	所属・職名	経営情報学部・教授	氏名	上野 雄史
	研究分担者	所属・職名		氏名	
		所属・職名		氏名	
		所属・職名		氏名	
	発表者	所属・職名	経営情報学部・教授	氏名	上野 雄史

講演題目	学生の思考力を高めるハイブリット型講義の試行
------	------------------------

**研究の目的、成果及び今後の展望**

コロナ禍において2020年度、2021年度の両年度においてオンライン講義への移行が余儀なくされた。これは程度の差はあれ、日本全国、世界全国の共通的な体験事項になった。国連の2020年の報告書によると、今回のパンデミックは世界における史上最大の教育システムの混乱を引き起こし、190か国以上、約16億人の学習者に影響を与えた。世界の学生人口94%、低所得者・低所得国では99%にまで影響を及ぼしたと言われている。オンライン講義においても対面講義と変わらない教育の質が提供されているというエビデンスもある一方で、オンライン講義にもたらされる教育格差の問題も指摘されるようになってきた。本講義の目的は、オンライン、オフライン（対面）講義において学生の思考力を高めるための講義設計を行うことにある。なお、この講義では、学生に対面かオンラインかの選択肢を与えるのではなく、特段の事情がない限りは原則対面とした。この意図するところは、対面時に小テスト実施等による学習の進捗状況のチェックを重視したこと、学生間の相互交流（ディスカッション等）を通じたモチベーションの維持があった。学生にオンラインか、対面かを選択させることは学生に自由度を与える一方で、教育の質を均質に保つことは困難となる。教育業界の中では、「ブルームよりもマズロー」と言われるように、オンライン講義では、家庭環境で教育の質に差が生じる（Pietro et al. (2020)、Sumitra and Roshan (2021)）。問題はこの差を学生が認知する機会が乏しくなる点である。オンライン上では、学生同士で理解度を確認する機会は少ないため、「分からないことが分からない」状況に陥りやすい。オンラインのみの講義形式では学生間の教育格差が認知されないまま進んでいくことが懸念される。

本講義では、学生同士のディスカッション、レポート作成、小テストを行う設計で構築した。小テストは学生たちの理解度の確認として、ディスカッション、レポートは学生の思考力（考える力）を意識した。全体の講義（特に後半）では、共通の課題（企業分析レポート）を与え、毎回の授業において進捗報告を行なわせ、学生同士のディスカッションを通じて作業を進めた。分析する企業も学生同士で重複しないようにし、異なる多くのケースに触れることもまた重視した。学習上の成果についてはまだ詳細を分析している途上であるものの、「会計学について苦手意識はあるが、興味はある」という学生の割合は、69.9%（講義前）から77.7%（講義後）に上昇し、「今は、苦手意識はなく興味もある」という学生も14%から17%増加した。また企業分析のレポートを通じて、レポート作成に対する意識が変わったと回答した学生も92.9%と高い水準となった。